

農業法人京丸園株式会社

—誰もが就労できる「ユニバーサル農業」への取り組み—

1. はじめに

本稿では、障がい者および高齢者等の農業就労に取り組む農業法人・京丸園株式会社（以下、京丸園とする）について報告する。京丸園は、農業施設（以下、ハウスとする）での水耕栽培を中心に農業生産に取り組み、積極的な営業活動も行う、あらゆる人々が就労できる「ユニバーサル農業」¹を目指す法人である。また、同園には、「NPO しずおかユニバーサル園芸ネットワーク（以下、NPO とする）」の事務局が設置されており、NPO は「園芸福祉」²や農業等の「農の福祉力」を活かしたさまざまな取り組みを行っている。京丸園代表取締役の鈴木厚志氏は、同園を「ユニバーサル農園」等として位置づけ、農業生産だけでなく、障がい者および高齢者などの就労や NPO 活動の実践を通じた多様な情報発信などにも取り組んでいる。

2. 組織の沿革と事業概要

京丸園は、鈴木氏が実家の農業を継承した 2004 年に設立された。それ以前は水田農業を中心とした農家であった。鈴木氏の父は、早くからみつばの水耕栽培（1973 年）やアイガモ農法に取り組むなど、新たな農業に積極的に取り組んできた農業者でもあった。現在、鈴木氏が水耕栽培・会社全体を、父が米や野菜などの土耕栽培の取りまとめを行っている。

京丸園の大きな特徴としては次の 2 点があげられる。一つは、健常者とともに障がい者や高齢者など多様な人々が従事する「ユニバーサル農業」に取り組んでいること。もう一つは、障がい者就労による高付加価値商品（「姫ねぎ」³栽培等）の生産である。

¹ 「ユニバーサル農業」とは、障がい者・高齢者などを含むすべての多様な人々が従事できる農業と定義する。

² 「園芸福祉」とは、「青空のもと、様々な場所で営まれる植物の種子～発芽～成長～開花～結実～収穫というプロセスに幅広い年代の人々が参加して、植物と接し栽培する楽しみや喜びを共有する」ことを目的とした活動。NPO 日本園芸福祉普及教会が、活動および「園芸福祉士」の育成をはかっている。

³ 「姫ねぎ」は、通常のサイズより小さいねぎで、この他、「姫みつば」・「姫ちんげん」などがあり、それらの小さい野菜を、京丸園では「姫野菜」と呼んでいる。

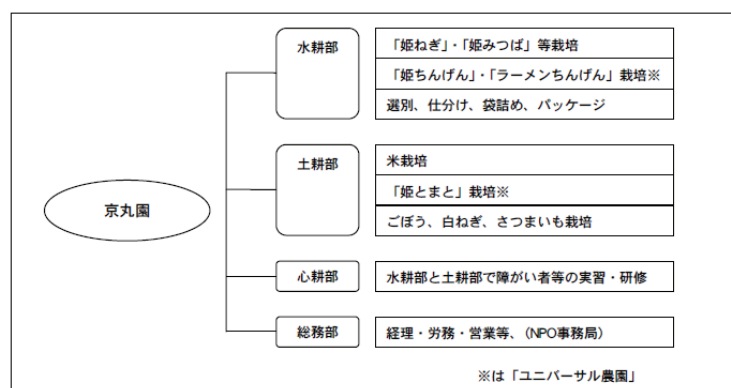


図 1. 組織図

京丸園の組織構成は、ハウスで「姫ねぎ」・「姫みつば」等の水耕栽培を行う水耕部、水田・露地で米・さつまいも等の生産を行う土耕部、障がい者等が農業実習・研修を行う心耕部からなり、特に心耕部は障がい者の受入れにあたり重要な役割を果たしている。

現在、京丸園では、小さなちんげん菜（「姫ちんげん」・「ラーメンちんげん」）のハウス栽培事業などを「ユニバーサル農園」の事業として位置づけている。単なる福祉のための農園ではなく、関わる人々すべての人達の“喜びと安心と誇り”となる運営を行い、“農業経営における幸せを追求”する農園を目指している⁴。

従業員数は不定期のアルバイトを含めると合計 50 名ほどである。社員 7 名（20～47 歳）、パート 31 名（20～77 歳）、その他アルバイト数名となっている。障がい者は、知的障がい者 4 名、身体障がい者 2 名、精神障がい者 3 名の計 9 名で、全員パートである。この他、障がい者研修生として、知的障がい者 1 名、身体障がい者 1 名、精神障がい者 3 名、高次脳機能障害者 1 名の計 6 名と、大学研修生 1 名を受け入れている。鈴木氏の 92 歳の祖母も一部作業を無償で手伝っている。また、野菜の袋詰め等の一部作業を内職として近隣 10 軒に委託している。なお、状況に応じて障がい者、パートは異動・兼務している。

農地規模は、ハウス（水耕栽培）70 a，水田（アイガモ農法）70 a，畑 50 a。主な農産物は「姫みつば」，「姫ねぎ」，「姫ちんげん」，「ラーメンちんげん」，みつば，米，さつまいも，ごぼうである。

3. 農業関連分野における障がい者就労の実態

（1） 「姫ねぎ」・「姫みつば」の栽培

「姫ねぎ」・「姫みつば」の栽培は、1994 年より取り組んできた。当初は障がい者雇用のノウハウ蓄積を主眼に置いていた。

栽培方法は、フィルムハウスの中の水耕栽培で、テーブル上に地下水をくみ上げ、苗を定植したスチロールをその水に浮かせ、農薬を使用せず液肥のみで育てる。ハウス内の水耕栽培では、年 17～20 作の収穫を行っている。

スタッフ（正職員）2 名、精神障がい者 5 名、高次脳機能障害者 1 名が作業にあたって

⁴ 「ユニバーサル農園」とは、働く様々な個人それぞれが役割を持つことができ、人との繋がりの中で、幸せを感じられる仕事づくりに取り組み、そして、農業経営としても成り立つ農園といえる。

いる。スタッフは基本的に、当日の指示出し、労務管理、そして液肥等の管理を行い、障がい者は播種・定植・移動・収穫・パネル洗浄等を行う。

ハウスでの水耕栽培に取り組むこととしたのは、作業が複雑ではなく障がい者でも取り組みやすいこと、この地域では冬場も比較的温暖であることから暖房経費が抑えられ 安価に生産できること、一年を通して働くことができること、通年の安定供給が可能であることなどを考慮したためである。

（２） 「ユニバーサル農園」での栽培作業

現在、「姫ちんげん」・「ラーメンちんげん」の水耕栽培、畑での作業委託栽培に取り組んでいる。

「ユニバーサル農園」では現場の運営を「農業経験のない健常者」と「農業経験のない障がい者」だけで行い、普及モデルづくりとして位置づけ取り組んでいる。

① 「姫ちんげん」・「ラーメンちんげん」の栽培

栽培方法は、「姫ねぎ」・「姫みつば」と同様のフィルムハウス内での水耕栽培である。2003年に 660 m²からスタートし、現在は 1,650 m²となっている。「姫ちんげん」については年 30 作、「ラーメンちんげん」については年 25 作を行っている。



写真：「姫ねぎ」栽培

スタッフ（正職員）2名、知的障がい者3名、身体障がい者1名、精神障がい者1名が作業にあたっている。スタッフは基本的に、当日の指示出し、労務管理、そして液肥等の管理を行い、障がい者は定植・移動・収穫・パネル洗浄等を行う⁵。

通常の水耕栽培は、コスト（特に人件費）を削減するために、養液管理や作業も機械化・オートメーション化することが多いが、京丸園ではあえてマニュアルとしている。

これは、より多くの作業に分解すること（以下、作業分解とする）で、障がい者でも作業可能な仕事をつくるためである。

⁵ なお、2012年現在は定植と収穫の作業を東京の特例子会社へ委託し6名が働いている。



写真：障がい者による定植



写真：敢えてマニュアル式の装置を開発



写真：障がい者のために開発した防除機械

なお、苗づくりは地元 J A に委託している。

結果として、より手間をかけることで、農薬がいらなくなるなど、環境にも健康にも良い労働環境整備、農作物生産につながっている。また、作業効率が自動機械の使用時より高まるなど、障がい者のための労働環境改善は、経営効率をも高めている。

②白ねぎ等の栽培

畑ではさつまいも 10a の栽培を行っている。畑は地域の農家から借りている。これらの作業は、農閑期などの仕事の少ないときの障がい者の仕事として位置づけ、地域の「福祉

施設」－「農家」（－「京丸園」）間の連携モデルとしても試験的に取り組んできた。

今後、これらの栽培についても「ユニバーサル農園」事業としていくことを目指している。さつまいも栽培では、土づくりから定植までを農家が行い、その後の作業は京丸園が実施している（収穫作業は福祉施設に委託）。さらには、企業との連携モデルとしても位置づけ、特例子会社にも委託していく予定である。

（３） 収穫後の作業

「姫ねぎ」「姫みつば」は、収穫した後の選別・仕分け・袋詰め・パッケージなど細かく手間のかかる丁寧な作業が必要とされることから、慎重かつ正確な作業を得意とする知的障がい者、そして精神障がい者・身体障がい者および高齢者等が作業にあたっている。

作業体制は、スタッフ（正職員）１名、パート１９名、知的障がい者１名、身体障がい者２名となっている。



写真：「姫ねぎ」の仕分け、パッケージ

（４） 販売・出荷

出荷される野菜の多くはＪＡ出荷、一部は、ネット販売等となっている。ただし、小売店等の販売先への開拓については、ＪＡに任せているばかりではなく、京丸園も専任の営業スタッフを配置し、積極的に行っている。

４． 地域貢献

さつまいも等の栽培においては、近隣の福祉施設の障がい者の働き場所にもなっており、福祉施設は収穫物の一部を地代・定植等の労賃として農家へ、管理料として京丸園へそれぞれ引き渡し、その残りで販売収益を得ている。苗づくりから定植までをＪＡが行い、土寄せ・草取り等の管理を京丸園が実施し、収穫もＪＡに委託している。

この他にも京丸園では、地域での新たな農業技術の開発を目指し、地域企業とともに農業生産にかかる機械や装置の開発に取り組んでいる。

つまり、京丸園の取組みは地域の障がい者および障がい者施設の就労の機会を提供し、

地域農地の管理，地域との連携による新たな技術開発に貢献することになっている。

5. 今後の課題

今後，京丸園は「ユニバーサル農園」の規模を拡大するとともに，より良いユニバーサルな就労環境を整備していきたいとのことである。また，「ユニバーサル農園」で農業と福祉を結びつけるノウハウ体系を構築し，ノウハウ情報とともにその理念を広めていきたいとのことである。

さらに鈴木氏は 2006 年，静岡県・浜松市・福祉組織等と連携し，農業と福祉を結びつける農業分野への障がい者等就労支援にかかる NPO を設立した（事務局を京丸園内に設置）。ここでは，「企業・農業・福祉の連携モデル」の実践に向けたさまざまな取組みをすすめている。

これからは京丸園だけでなく，こうした取組みを通じて，障がい者および高齢者等の農業における就労の促進，就労理念とモデルの構築および普及，さらには企業への雇用にかかるノウハウ・情報の提供に努めていきたいということである。

「長く働くことのできる職場づくりを目指し，派遣労働や非正規雇用ではなく，そこで障がい者も健常者も，高齢になっても働き続けることができる安定農業経営としていきたい。」と鈴木氏は話す。

6. おわりに

過疎化・高齢化により農地管理の担い手がほとんど期待できない農山村地域では，障がい者や高齢者等の存在・役割はますます不可欠なものとなる。

今後は，当該地域のように比較的元気な農業者が存在する地域においても，障がい者や高齢者等は重要な存在となる。ただ，特にこうした地域では農地集積，農地管理のあり方，出荷などにあたり，近隣の農家等と衝突する可能性がある。京丸園のような取組みを面的な広がりとし，持続的な取組みとしていくためには，地域との信頼関係構築が鍵となる。

とりわけ地域の農家や J A 等との十分なコミュニケーション・連携が重要となろう。また，特に都市地域では，「農の福祉力」⁶を活かした教育，環境，医療，福祉等のサービスとしての新たな農業の産業としての可能性も見出すことができるだろう。

（濱田 健司）

⁶ ここでいう農の「福祉力」とは，農作物をつくること，食べること，その場にいることなどにより「癒し」・「健康づくり」等の効果を発揮する，人の心・気・体などへの作用の一つと定義する。「福祉力」は，①癒し，②健康づくり，③治療，④レクリエーション，⑤生き甲斐づくりなどの効果を発揮する。（「共済総研レポート」2007 年，No.92 参照）